

頃の町長さんだったんだね。」
「俺は、毎日胆振線に乗って脇方に通ってたんだ。掘り出された鉄鉱石を貨車に積み込む作業をしてたからね。廃線の時、レールを片づける仕事もしたよ。」

「保線区だったから、冬は除雪ロータリー車に乗ってたよ。いろんなことがあったな。廃線の時に、国鉄を退職したんだ。」

「喜茂別駅の構内でも脱線事故があつてね…人身事故もあつた。構内にお地藏さんを2体祀つてある映像があつたけど、事故の犠牲者を供養したときのものなんだ。」

上映が終わつても、会場のあちこちで思い出話に花が咲いていま



喜茂別駅の構内に祀られた地藏さんの映像

す。共通の知り合いの話に及び、それまで知らなかった新たな関係に気付く、新鮮な驚きがその場に高揚感をもたらします。協力隊の徳永純子さんは、そんな話の一つ一つに耳を傾け、必死にノートに書き込んでいきます。地域おこし協力隊としてどのように地域と関わるのか、ひとつの答えを見出したようです。

III 地域の人が繋がりを直す きっかけを創りたい

繋がりの連鎖が 上映会を支えた

この胆振線の上映にどのような思いを託したのか、どんな成果が見えてきたのか。上映会に取り組んだ協力隊スタッフの中心となつてその実現に大きく貢献した徳永純子さんに、お話を聞きました。

「胆振線のどこに惹かれたんですか？」

「胆振線の跡と言っても、喜茂別ではそれとわかるものは何にも残っていないじゃないですか。跡地利用の施設も無ければ、碑も

立ちました。あとは、各地区の方々が賛同して、支えてくれました。ひとつの繋がりが、次の繋がりを生んだ。それが、成果そのものです。」

「市街地でも、上映会は大成功でしたね。」

「今回の最大の目標は、市街地での上映会実現だったんです。市街地と集落をどうしたら結びつけることができるか、私たちはいつも考えて活動していました。ですから、市街地と地区を繋いだ胆振線の歴史を、市街地の人にもぜひ見てほしいなと思います。それに、市街地の人にとつても、胆振

立ってない。逆説めいた言い方で、すけど、何も残っていないことが、心に残るきっかけになったんです。御園の三浦力男さんが次のような話をしてくれたことも、きっかけのひとつです。

「御園駅を過ぎると新大滝駅までは登りの勾配なんだ。鉄鉱石を積んだ10両以上の貨車は、1回ではすんなり峠を超えることができなくて、何回も行きつ戻りつして弾みをつけて、やっと超えていくんだ。家の前で、その様子をよく見てたよ。」

かつての光景が今は無いことを、みんな、寂しいと言います。でも、私たちのように、何も無いところにはじめて来て、そこにかつての繁栄を重ねて想像すると、とても豊かな夢を感じます。何もな



協力隊スタッフ 徳永純子さん(右)

いから…ではなくて、かつてはあつたと切り返すことで、これらの可能性を感じることが出来ます。」

「そのようなきっかけから、どんな紆余曲折があつて、今回の企画が実現できたのですか？」

「胆振線が町や村を繋いだように、いろいろな人との出会いが次々と繋がったからです。金山の三浦さんのお話に触発されて「摩訶不思議カルタ」※1の札の1

線はとても大事な思い出であることを、いろんな方から聞いていましたから。」

地区のたまり場で 集まり直す

思い出の中を走っていた胆振線の雄姿を25年ぶりにビデオ映像の中で再確認した人々は、終わった後も、往時の様々なことを語り合いました。久しく忘れていた気持ちの高ぶり、遠くを思う安らぎのひと時が、会場全体に漂います。かつては当たり前のように繰り広げられた集いの光景。暮らしのほんのちよつとしたことで人々が寄り集まり、語り合う。とりとめもなく続くそんなひと時の連なりから、地域に生きる幸せな気持ちが続ぎたされ、生きる活力が滲み出るように溢れてくるたまり場。上映後、眼がしらが熱くなつた多くの人たちは、互いに繋がりを直すことのかげがいを感じたのではないのでしょうか。私たちは、地域おこし協力隊の活動に触発され、この地に生きる本当の幸せとは何かを共に考える好機を共有したのです。

[御園地区会場]



[市街地会場]



[鈴川地区会場]